

## 二 中等教育機関としての成果

### 1 中学校高等学校の発足と戦後の改革

#### (1) 中学校高等学校の発足

昭和二十二年（一九四七）の学制改革の主目的は、戦前の複雑であった中等教育の整理と義務教育の年限延長であった。一般社会では、施設・設備・教育組織などにおいてきわめて不満足な状態であったが、本校においては「復興に尽くした人々」の項でも記したように、教職員・卒業生・保護者の懸命な努力によつて順調に進行した。

昭和二十二年四月十四日、三三一名の新入生を迎えて新制中学校第一回の入学式が挙行された（昭和二十五年「一九五〇」までは跡見学園中学部と称す）。折しもこの年は、創立七十二周年記念祝典と李子校長八〇歳の祝賀会、そして学園復興のためのバザーが三日間にわたつて盛大に開催された。

昭和二十三年（一九四八）の新制高等学校の発足

当初の一年生は、中学部からの優等入学生と、選抜によつて合格した二七名の新入生を加えて二三〇名でスタートした。

昭和二十四年（一九四九）三月には昭和十八年（一九四三）入学の高等女学校生で新制高等学校に残つた四二名が最初の新制高等学校として卒業（薫風会）、同十九年入学の高等女学校生で卒業を希望するもの一三二名は高等女学校生として卒業（翠光会）した。

跡見学園中学部学則・高等学校学則の第一条では、「教育基本法」の精神に基づき平和日本の国民としての人格の完成をめざし、心理と正義を愛し、勤労と責任を重んじ、自由かつ自主的精神に満ちた心身健康な女性の育成を期する学校であると記している。そのうえで跡見花蹊建学の精神を継承することにあつた。昭和二十七年（一九五二）の学園要覧に掲げられた内容は、

跡見学園中学部教科課程

教科		学年		
		第一学年	第二学年	第三学年
必修教科	国語	175(5)	175(5)	175(5)
	習字	35(1)	35(1)	
	社会	175(5)	140(4)	140(4)
	国史		35(1)	70(2)
	数学	140(4)	140(4)	140(4)
	理科	140(4)	140(4)	140(4)
	音楽	70(2)	70(2)	70(2)
	図画工作	70(2)	70(2)	70(2)
	体育	105(3)	105(3)	105(3)
	家庭	140(4)	140(4)	140(4)
小計		1050(30)	1050(30)	1050(30)
選択	英語	105(3)	105(3)	105(3)
	習字			35(1)
	小計	105(3)	105(3)	140(4)
総計		1155(33)	1155(33)	1190(34)

備考 一年を35週とする。数字は一年間の授業時数。  
カッコ内の数は時間数。

性

○ 人生を、正しく強く生き抜く豊かな愛情と実践理性の涵養

○ 家政を、能率的科学的に処理する能力

○ より幸せな家庭生活を作り上げる高い趣味

○ 女子が実質的に男女平等の権利を主張するための基礎条件としての職業能力

右のような教育目標によって学習指導要領の枠内で教科課程・教科内容の工夫がされた。そしてこのとき教科課程のほかに、課外課程を置いて希望者に箏曲・点茶・生花を修めさせることも採り入れた。このようにして跡見学園中学校高等学校はスタートした。

(2) 被災校舎の再建

被災した校舎の様子を、当時の生徒の回想手記は「校舎の三階は総て立ち入り禁止、二階はガラスドウ、お手洗いは一か所」「暖房は火鉢、寒いので教室ではオーバーを着ていた」「夏は冷たい水を求めて井戸の前に並び、飲み終わるとコップをすすいで次の人に渡し、次のこぎ手になった」と書いている。今日の恵まれた環境からは考えられない惨たんたる状態であった。しかし、そうしたなかでこそ「友情の絆はより強いものになった」という手記もある。

戦後の混迷するなかでの復興は、卒業生・保護者の復興計画に対する絶大な協力と理解が大きな



支援となった。昭和二十一年（一九四六）二月には早くも本館二階部分の第一期復旧工事に着手することができた。その後も着々と工事は進み、昭和二十四年（一九四九）十一月に着工した第五期外側塗装工事によつて、校舎の復旧工事は完了したのである。校内放送施設や図書館の再開もこの間に進められた。昭和二十六年（一九五二）の冬からはスチームによる暖房も復旧し、教室の整備が着実に進んだ。昭和二十七年（一九五二）には隣接する旧日本冷蔵（株）跡地を購入し、そこに図工教室を新設した。

同二十七年三月二十九日学校法人跡見学園として第五回目の理事会・評議員会において「跡見学園施設整備計画大綱」が示され、創立八〇年の記念事業として「中学・高等学校独立校舎」を目標に計画が立てられた。それによつて昭和三十

昭和二十四年当時の復旧工事。戦災で教室を一部しか使えず、一クラス七〇名という状態で窓ガラスも破れたままで、傘をさして授業をしたこともあった。

### 「話の泉」に登場した跡見女学校

戦後を音で記録した一本のカセットテープが市販されている。「終戦の詔勅を読み上げる昭和天皇」「日本降伏文書調印式のマッカーサーの演説」「極東軍事裁判での東条英機の声」などである。

敗戦により荒廃した国土、国民の娯楽はNHKのラジオ番組しかなかった。「君の名は」というメロドラマが放送されるとお風呂屋さんが空になったという時代、娯楽番組として「二十の扉」「私は誰でしょう」といった番組があった。そんな中に「話の泉」という知的好奇心をそそるクイズ番組もあった。サトウハチロー、太田黒元雄、渡辺紳一郎など当時の錚々たるメンバーを解答者に揃えた番組であった。

前記したテープに、何百時間に及ぶ「話の泉」の収録テープの中から「背せみに垂れたる黒髪に挿したるリボンがヒラヒラ 紫袴がサイラサラ 春の胡蝶のたはむれか」と唄われ

年（一九五五）十一月新校舍建築の地鎮祭が挙行された。翌年普通教室六、研究室二、屋上使用可能の鉄筋コンクリート三階建ての校舎（二号館）が完成した。

### (3) PTAの結成

戦後、教育の民主化に伴う学制改革により、昭和二十二年（一九四七）四月一日、跡見学園中学部がスタートした。学内ではいち早く保護者と教員が協力して、子供の教育環境をより良いものにすることを目的とした会の準備が進められ、昭和二十三年（一九四八）七月十一日、跡見学園中学部第一学年「父母と先生の会」(PTA)の結成総会が開かれた。ここで十四条からなる規約が承認された。第二条では「本会の目的は学校と家庭と社会との関係を密接にし、互いに協力して教育の完成を計るにある」、第五条では第二条の目的を達するために「教育上必要と認める懇談会、研究会、学芸会、体育会、娯楽会、音楽会、厚生、保健衛生、体育にかかわる仕事を行う」と明記されている。当時は、学級文庫、戸棚などが「父母と先生の会」固有のものとして設置された。

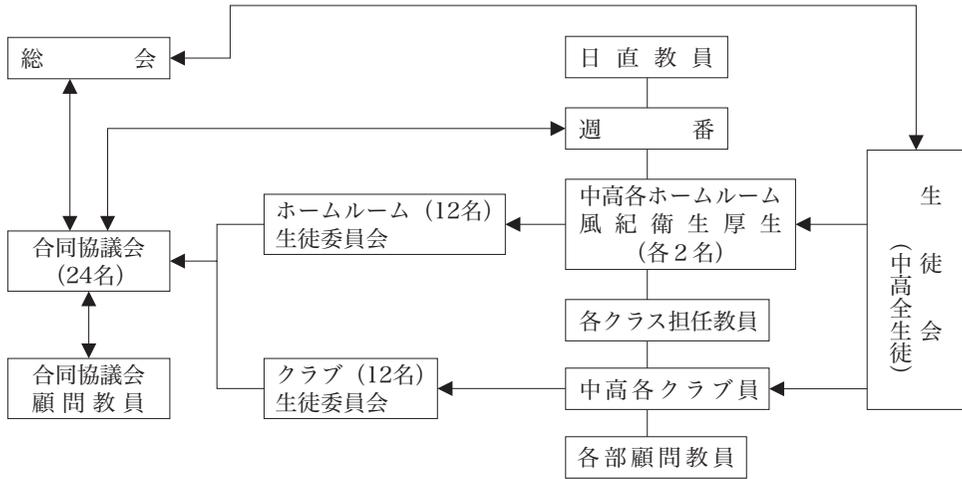
昭和二十三年十月に開かれた「父母と先生の会」

たのはどこ、という司会者の問いかけに渡辺紳一郎が「跡見女学校」と答えて喝采を受けている部分が収められている。敗戦直後の娯楽の一面を表わしたものと思うが、よりよって、そこにこの部分が収録されていることは単なる偶然だろうか。いやそうではない。「跡見」の大きさを実感するのである。

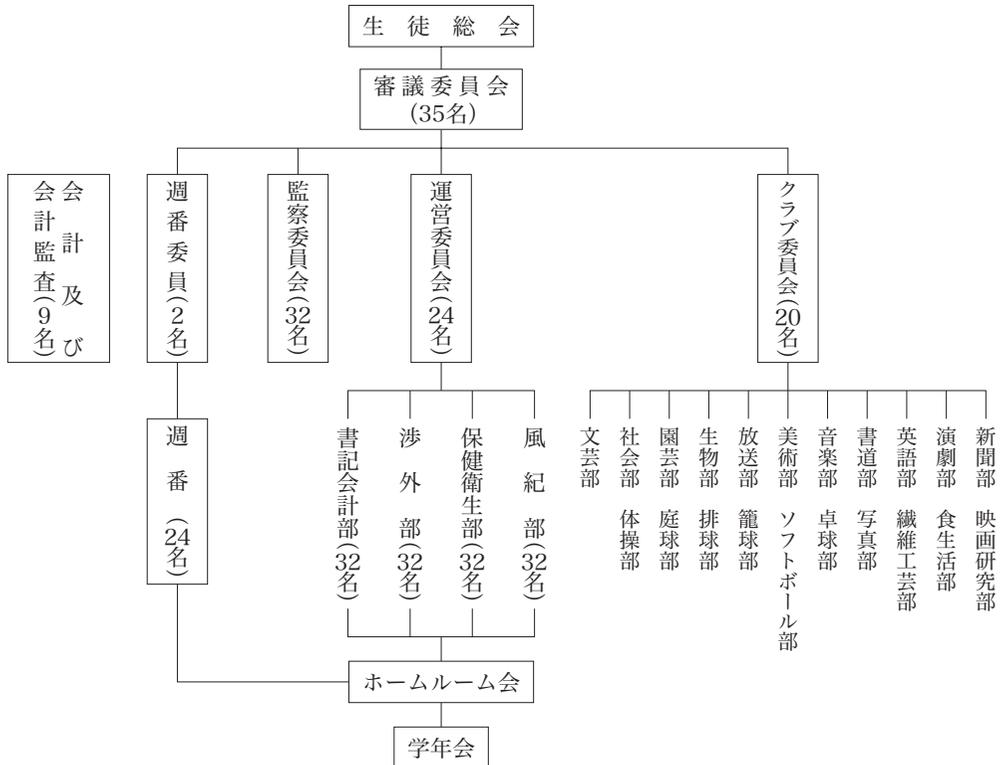
で話題になったことの一例をあげると、「英語の発音記号を教えてほしい」「数学の力不足を補ってほしい」など、五十年後の今日でもあまり変わらない話題に加えて、「停電が多いので宿題の調整をして欲しい」といった時代を反映した話題もみられた。

こうしてスタートしたPTAは、年を追うごとに次々と学年別のPTAが結成され、何年度入学PTAという形で各学年単位のPTAが創設され、活発な活動を始めた。昭和二十九年（一九五四）には各学年PTAが独立性を維持したまま「PTA連合会」という新たな組織が発足した。学園全体の教育環境の整備改善を支援する組織として出発したのである。現在は学園祭への協力事業の一つ

### 生徒会の運営組織（昭和25年～）



### 生徒会の運営組織（昭和29年～昭和32年）





現在でも発行が続く『白壁』創刊号などがみられる

として、模擬店の出店や作品展でも活動している。  
(4) 生徒会の発足

戦後間もなくの生徒活動は、クラブ活動を組織化した学友会と、各クラスに校長が任命した風紀係・衛生係・厚生係の自治委員からなる自治会が並立して活動の基盤となっていた。昭和二十五年

(一九五〇)、学制の改革に伴って生徒活動にも新しい息吹が吹き込まれた。その年の六月、八章三十六条がらなる規約が制定され「生徒会」が誕生した。組織は、校長任命の各学年二名計一二名とクラブ選出の一二名からなる「合同協議会」が中心となった。その中から、会長・副会長・その他の役員を選出した。自主的精神を養うという、新しい視点のもとで、生徒の活発な自治活動はクラブ数の増加・クラブ発表の発展などに繋がった。この頃、新聞部から『跡見学園新聞』が、文芸部から『白壁』が、社会部から『まど』が発行されていた。

昭和二十九年(一九五四)、生徒会の基盤であるホームルームの意見を反映しやすくするための規約改正と、それに伴う組織の大幅な改造が実施された。

昭和三十年(一九五五)、学園創立八〇年を迎えて生徒会は会誌『跡見』を発行することになった。当時の生徒会顧問横田正次は会誌第二号に「かけ橋を渡る人」と題して次の一文を寄せている。

生徒会誌「跡見」は八十年の伝統の流れに新しい杭を打ち込んでそこに渡されたかけ橋である。しかし、この橋はまだひ弱い。今後更に何本ものがつちりした杭を打ち込まなければならぬし、橋桁も欄干も一段とその装いを新たにしなければならぬ。そして激流に流されず濁流に汚されず、内・二千の会員を渡し、外・校友とのかけ橋として行かなければならない。

その後、この橋を方を越える人々が渡つて来た。時に磨ぎをかけながら、時に補強をしながら、活動は現在に引き継がれている。

花蹊胸像除幕式 写真中央が朝倉文夫



李子像制作中の風景。朝倉彫塑館には現在でもこの雰囲気をただよわせる場が残っている



### (5) 花蹊・李子胸像の再建

第二次世界大戦前、校庭の一角にあった花蹊校長・李子校長の胸像(本山白雲作)は登下校する生徒達が常に仰ぎ見たものであった。戦争という不幸な状況下、供出というかたちでその姿を消した。戦後まだ混乱の続くなか、いちはやく花蹊校長

の胸像を再建したいという思いを強くした昭和十九年(一九四四)入学の翠光会・七五会の卒業生が、学園への記念品として寄贈することを決めた。胸像は、花蹊の写真をもとに、文化勲章を受章したばかりの彫刻家朝倉文夫の手によって見事によみがえった。昭和二十四年(一九四九)六月十八日、李子校長、朝倉文夫ら臨席のもと盛大に除幕式が挙行された。この式後、李子校長の寿像も再建されなければならぬという声が校友の間にわきおこり、発起人会が結成された。再度、朝倉の手をわずらわすことになったが、朝倉の快諾を得て、今度は李子校長が、直接日暮里の朝倉のアトリエに赴き、モデルとなって塑像の制作に立ち合った。昭和二十五年(一九五〇)五月二十六日に献納式が行われた。

現在、花蹊胸像は正門を入って左側、紅梅・白梅を背にして安置され、登下校する生徒の姿をあたたかな眼差しで見守っている。李子胸像は中学校の図書館に安置され、学習に熱心な生徒にやさしく、励ましの声を掛けている。

### (6) カリキュラムの改訂

戦後、新制中学校高等学校が発足し、その教科

教科課程表

中学校					高等学校				
学年	1	2	3	計	学年	1	2	3	計
国語	5	5	5	15	国語	3	3	3	9
数学	1	2	3	6	数学	3	3	3	9
社会	5	4	4	13	社会	5	5	5	15
歴史		1	2	3	歴史	5	5	5	15
地理	4	4	4	12	地理	5	5	5	15
理科	4	4	4	12	理科	5	5	5	15
音楽	2	2	2	6	音楽	3	3	3	9
図画	2	2	2	6	図画	3	3	3	9
労働	3	3	3	9	労働	3	3	3	9
家庭	3	4	3	10	家庭	3	3	3	9
英語	5	4	4	13	英語	5	5	5	15
計	34	34	34	(100)	計	33	33	33	99

備考 1. 本表は昭和27年度以降の教科課程である。前年度の国語、英語については教科科目と並列の上本表の統計に計す。  
2. 本表で30名以下の科目は廃止しない。33名以上39名以下の場合は状況によって廃止と決定する。

課程（カリキュラム）が定められた。そのうち中学校に関しては実際の状況にかんがみ、昭和二十四年（一九四九）に一部改善された。すなわち、体育に保健衛生をも合わせて指導することとしてこれを保健体育と改めた。職業科も一層実生活に役立つように内容が改められ、名称も「職業・家庭」となった。自由研究は特別教育活動の時間が設け

られたことよって廃止された。その後の昭和二十六年の改訂では、道徳教育の振興の観点から判断力と実践力に富んだ自主性、自立的な人間の形成を目指すこととなった。

跡見学園の昭和二十七年年度の教科課程表（上図）を中学校発足当時のそれとくらべると若干の変化が見られる。すなわち中学校の三学年において家庭科が二時間減つたのに対して英語が四時間増えたのが目立ち、そのほかでは習字が一・二学年だけであったのが三学年を通じて履修されることになり、これも一時間増えているが、跡見の特色がここにもみられる。一年間の総時間も一時間増えている。この教科課程のあり方は原則的に以後も引き継がれることになる。

一方、高等学校に関しては昭和二十六年（一九五二）に高等学校指導要領が定められた。その特色は、選択教科制と単位制にあった。国語、社会、数学、理科、保健体育の五教科をすべての生徒に對し共通の必修とし、なかでも国語甲九単位、一般社会五単位、保健体育九単位は必修とされた。卒業の条件は八五単位以上と定められ、そのうち三八単位を共通必修の教科で占めるものとした。

この新指導要領に基づいて跡見学園では先に見た中学校とともにカリキュラムの編成が進められた。その様子は昭和二十五年度の「校務日誌」からもうかがえる。すなわちカリキュラム委員会がしばしば開かれ、また生徒の選択希望調査も行われている。その結果成立した昭和二十六年度のカリキュラムは不明であるが、昭和二十七年度的カリキュラムは前ページの表のとおりである。高二、高三は「進学」「卒業」の二コースに分かれているが、これは上級学校に進学を希望するコースとそうでないコースの意味であろう。両コースにおいて漢文、数学および理科、芸能、家庭、職芸などで相違が見られる。進学コースに「補講」が設けられていることにも注目される。「芸能」は学習指導要領をみると「音楽、図画、書道、工作」の四科目からの選択となっている。また「職芸」とは職業科の中の「家庭技芸」(保育など)かとも思われるが、翌昭和二十八年(一九五三)からは職(商)となった。すなわち職業の中の商業(文書事務、珠算、商業計算など)を指すのであろう。カリキュラム全体の特徴として選択の幅の大きいことが上げられよう。

なお新カリキュラムが施行された昭和二十六年から、跡見学園では一学年度二期制が採用された。すなわち前期は四月から九月まで、後期は十月から三月までとしたが、その後昭和三十年に前期は八月まで、後期は九月からと改められた。

#### (7) 夏季行事・冬季行事

戦後、復興の努力がさまざまな形で行われているなか、夏期休暇中の行事も着々と進められていた。現在の補習・補講にあたる学力増進のための講座が昭和二十二年・二十三年(一九四七・四八)当時は「緑の教室」という名のもとに、数学・英語を対象に行われた。昭和二十四年(一九四九)からはサマースクールと名称が変わった。

また鍛錬教室という名のもとに登山や水泳訓練を、志賀高原、裏磐梯、奥日光、那須高原、天津海岸、下田などの地で希望者を対象に実施した。コースによって人数は異なったが、延べ人数にすると毎年三〇〇名からの生徒が参加していた。昭和三十年(一九五五)の鵜原寮の開設、同三十二年浅間寮の開設に伴って、この行事は学年指定となり、臨海学校・林間学校として移行していた。

昭和三十年代を走った草軽電鉄



昭和四十年頃の照月湖におけるスケート教室



昭和十五年(一九四〇)の冬、妙高高原池の平楽山荘を拠点に、校友黒田米子を指導者としてスキー練習会が一週間にわたって行われたという記録がある。この行事は戦争が激しくなる昭和十八年(一九四三)まで続いていた。戦後浅間寮の開設は、

近くに湖面結氷のすばらしさで知られる照月湖があつて、スケート教室を行う条件に恵まれた。昭和三十四年(一九五九)一月四日、高校三年生で滑走可能な者三〇名が、上野駅の三等待合室前に九時に集合、軽井沢から草軽電鉄に乗り換え十七時ごろ寮着という形で始まったのが戦後の冬季行事のスタートであつた。スケート教室は照月湖が環境汚染で結氷しなくなる平成五年まで続いた。なお、後のことになるが、スキー教室は、昭和四十年(一九六五)十二月に妙高高原国際スキー場を皮切りに、志賀高原・妙高高原池の平、そして昭和四十五年(一九七〇)妙高高原赤倉寮の開設に伴つて、しばらくの間は、新赤倉を拠点に実施された。この頃の教室は、リフトを使うことは稀で、特に初心者には斜面との格闘であつた。しかし、昭和五十三年(一九七八)春、南地獄谷から押し出された土石流によって寮を失い、再び適地を求めて転々とすることになった。蔵王・志賀高原・天元台そして現在の舞子高原へと移つた。

#### (8) 生徒会クラブ発表会

終戦直後は学友会という名称の下で、習字・手芸・国文・生物・日本画・報道の六つの部が活動

していた。昭和二十四年（一九四九）には、生徒会の発足を目前に英文・社会・音楽・演劇・家政（割烹）・物理化学・数学のほかに運動系の排球・卓球・野球・体操・庭球が加わり、十八の部へと活動が広がっていった。昭和二十五年（一九五〇）の生徒会の発足に合わせて、部の名称変更や新設されるクラブが次々と誕生した。そのことについて昭和二十五年から昭和二十九年（一九五四）の変化を列挙すると次のようになる。

名称を変更したクラブ

英文部↓英語部 国文部↓文芸部

報道部↓新聞部 日本画部↓美術部

家政部↓食生活研究部 手芸部↓繊維工芸部

習字部↓書道部 野球部↓ソフトボール部

※ 新設されたクラブ

籠球部 写真部 放送部 園芸部

映画研究部 キリスト教研究部

※ 活動内容によって分派したクラブ

社会部が日本史班・世界史班・時事問題班

美術部が日本画班・洋画班

体操部がダンス班・器械体操班

廃部となったクラブ

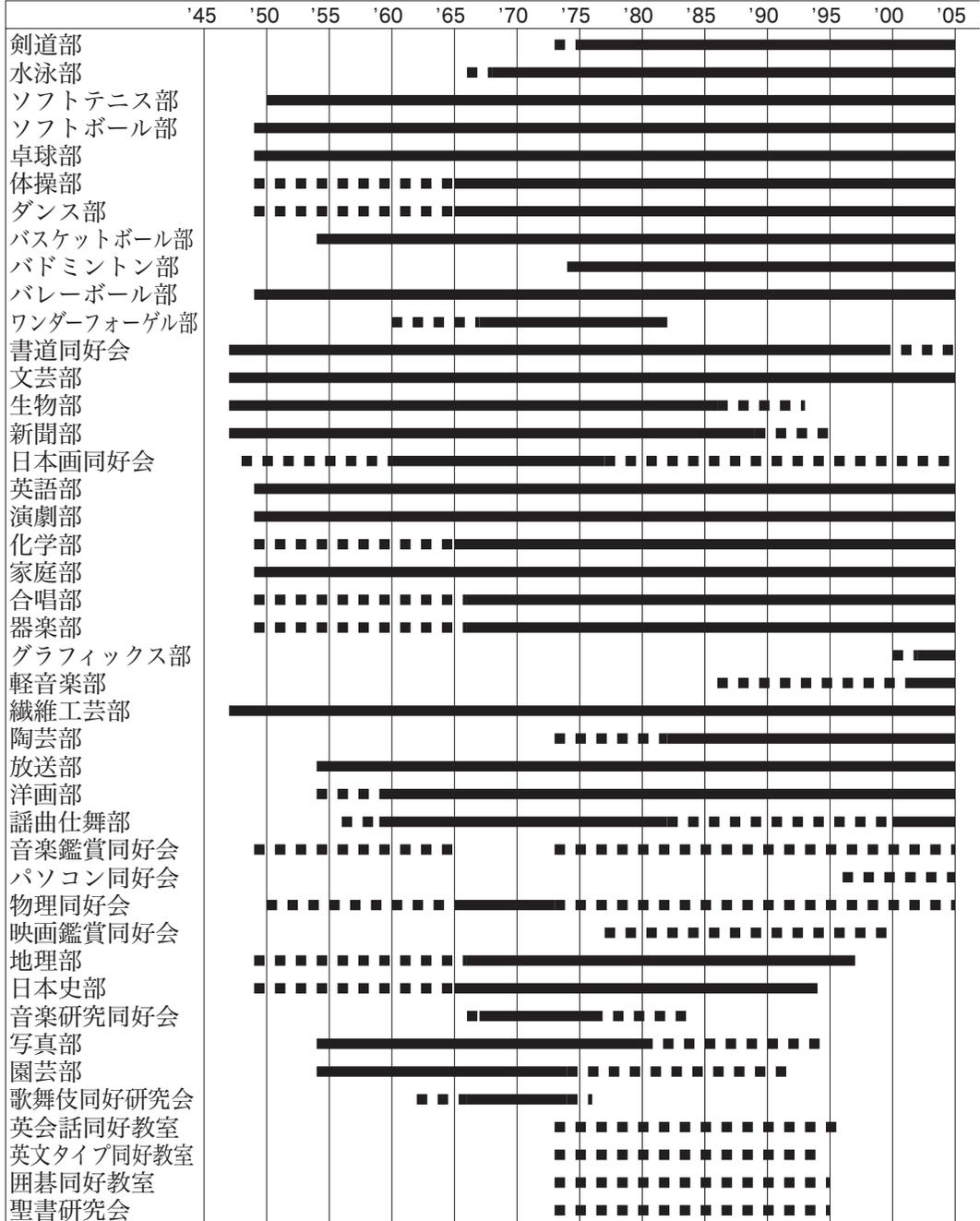
数学部 映画研究部 キリスト教研究部

こうしたクラブは昭和二十七年（一九五二）までは、時宜にその成果を発表していたが、昭和二十八年（一九五三）からは、日頃の創意と工夫を凝らした成果を「生徒会クラブ発表会」とし、秋に同時に公開することになった。

#### (9) 高等学校校服の改定

終戦直後、物資欠乏のため布地の入手もままならず、「清楚なものなら」ということで、さまざまな服が着用されたことも一時期あった。基本的には昭和五年（一九三〇）、お塾袴の形を生かして制定された洋装の制服が、中学校・高等学校同一のものとして用いられていた。花蹊・李子の制服に対する「形から心への教育、勉強せんとする心構えと意欲の発揚」の思いには何ら変わるものではなかったが、昭和二十九年（一九五四）戦後も徐々に落ち着きを取り戻す中で、制服をすつきりさせたいという学校の意向で改定に向かった。「中学生、高校生の年齢差を考慮して」という条件を付けて、文化服装学院の原田茂にデザインを委嘱

### クラブの変遷

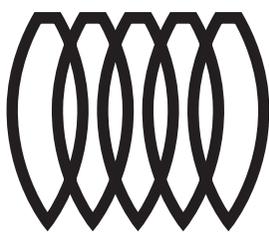


実線は部、破線は同好会・同好教室を表わす(名称は平成15年現在のものを使用した)

改訂された高等学校生の校服。バックルはまだ従来のものが使用されていた。



昭和三十四年に改訂されたバックルのデザイン



の制服に仕立て上げられた。制服が替わったこと  
によって、高校生としての学校生活における意識  
の高揚につながった。ブラウスの衿の尖った角度  
は気持ちを引き締め、きちつとするようにという  
配慮から制定当時のままとした。昭和三十三年（一  
九五八）には、中学生の制服にも一本ひだを加え  
たものが用いられるようになった。  
昭和三十四年（一九五九）にはベルトのバックル  
も改定された。跡見学園短期大学生生活芸術科の村  
尾絢子によって、桜の花びら五弁をデザインした  
現在のバックルになった。従来は、月桂樹の葉が  
デザインされた丸型のものであった。

した。原田はそれまでの  
制服の形は、伝統が生か  
された大変良いものであ  
るとして、中学生の制服  
は従来通りとした。高校  
生は、お塾袴のひだ九本  
が生かされていた従来の  
制服に、二本のひだを加  
え、ウエストを絞り、胸  
と腰の線を強調した現在

昭和三十五年（一九六〇）三月にはオーバーコー  
トとレインコートも原田によるデザインで制定さ  
れた。

#### ⑩ 『汲泉』の復刊

明治三十三年（一九〇〇）四月、それまでの汲泉  
会を拡張して跡見校友会が組織された。その機関  
誌として雑誌『汲泉』が発行された。第一号の発  
行は同年六月十日のことであった。その号に寄せ  
た服部躬治の次のような一文がある。

友は伴なり。相ともに、つれだち並びたつ  
を謂ふなり。伴の一致は、ただ信によりてぞ  
保たる。跡見校友会は、校の文字を以て限ら  
れたる団体なりとす。その友の相一致せる信  
念は、この団体によりて発動し、開展せられ  
む。つれだち並びたちて、相共に助け合はむ  
は、人々のひとしく、正に期するところなら  
む。

そして最後に、

汲みて 汲みて もとの心を汲みあひて 清



水のすゑは 思はざらなむ

と歌っている。

以来、雑誌『汲泉』は昭和十八年（一九四三）、一二三号まで発行された。しかし戦争が総てのものを奪い、消去してしまう時代をつくり、『汲泉』も休刊せざるをえなくなった。戦後、四散していた教職員、生徒、校友達も徐々に学校に戻り、復興に力をそそぎ始めた。校舎施設の復興、運動場の拡張、寄宿舎の新設など内外の諸施設、組織が次々と整えられた。昭和二十九年（一九五四）校友会でも『汲泉』復刊の気運が高まり、立ち上げることとなった。再刊一号から三号までは、タブロイド版の発行であった。再刊を祝って若松会の増田浪江が、

茂りあふ 青葉のかけに つとひきて もとの泉を 汲むがうれしさ

と歌っている。挹流尋源（ながれをくみてみなもとをしる）、校友との絆を大切に（一五〇年・二〇〇年に及ぶ学園の発展を祈りたい）。

## (11) 図書館の開設

図書館司書として勤務した下永夫規子が『跡見学園中学校高等学校紀要』三号に「学校図書館のあゆみと現状」について述べた、開設当時の苦勞が伝わってくる一文がある。抜粋してここに掲げる。

本校では昭和十一年ごろ、学習研究の場としての図書館を志向し、中村崧雄の「学校に図書館のないのは人間に頭のないようなもの」という考えのもと、基本図書を中心にした図書館が開設されていた。しかし、戦災でその大部分を失った。新しい学制のもとで、いち早く図書館開設の準備が進められた。昭和二十二年には、その後の学校図書館の分類体系として最もふさわしいNDCの採用を決定していた。図書係発足後二年目の昭和二十四年には、図書館活動を開始するための基本的な要素である担当者・蔵書・施設の三要素が整った。しかし、図書館としての独立した予算を持たなかったため、なかなか思うようにはならなかった。やがて学校教育における

図書館の重要性が、保護者にも認識され、学校諸費として図書費の徴収が実現した。昭和二十五年当時、生徒一人当たり五十円の図書費は決して少ない額ではなかったが、これによつて蔵書も年を追つて増大した。この年四千七百冊しかなかった蔵書が、八年後には二万二千冊余りを数えた。

昭和三十年代、教育の曲がり角ともいわれる受験準備教育が実現する中で、図書館活動もひとつの曲がり角に直面する事となった。しかし、本校ではその道をとらず図書館活動を活発につづけた。昭和三十三年（一九五八）には次のような新しい企画を打ち出した。

◇ 図書館運営に直接たずさわる担当者と、間接的関係をもつ教師の中からそれぞれの教科を代表する人で構成する図書委員会を発足する。

◇ 学校図書館運営に生徒の意見を反映させて、親しみやすさを持つてもらうため、選出された生徒による生徒図書部員を組

織する。

◇ 図書館や図書館資料への興味や親近感を培う「図書館だより」を発行する。

右のような指導・奉仕活動の充実が活発に展開されたちようどの頃、図書以外の学習材料や種々のマスメディアの性能が著しく発達し、諸資料が有機的・関連的に用いられるようになった。本校でもそれらの資料が総合的に活用できるよう、図書館がその体制をつくることを企画した。昭和三十五年（一九六〇）には視聴覚係が新たに配属され、視聴覚室（閲覧室と兼用）が開設された。

## 2 学校体制の整備

### (1) 飯野保校長の就任

昭和三十二年（一九五七）二月十六日 李子校長の逝去の後をうけて、戦後の復興の中心として尽力した飯野保主事が三代目校長として就任した。昭和三十三年（一九五八）の生徒会誌『跡見』に寄せられた「所感」の一文は、半世紀を経た今日ではあるが、世界が少しも進捗していないことを考



えさせる内容である。

ここで海外のことを考えてみれば、同民族相食<sup>は</sup>むようなことはお互いにやめて和親の心で平和な成果は作れないものでしょうか。局部局部の争いが遂には世界の大戦の導火線とならないとは限りません。人類は永久の平和と幸福をねがっているにもかかわらず、一方では大国と称する国々は争って世界を破滅に導くような危険な核兵器の研究にあけくれして、この危険きわまりない兵器を互いに懐にいだいて居ることによって、兵力の平均が保たれて世界の平和が維持されるのだと言いつつ、大気や公海を汚染して世界人類の生命が損なわれるようなことを敢えてして居ります。願わくはこの力を人類永遠の幸福のため平和利用にきりかえてもらいたいものです。大国の指導者たちは相計らって世界の福祉を考えるべきだと思えます。

ここは花蹊先生のことを考えてみたいと思います。先生は熱心な観音信託家でありました。先生の観音信仰のお心は、慈悲と衆生済

度と女性の柔和の相ということにあつたと思えます。

慈悲とは「抜苦与楽」の精神で、人の苦しみをぬいて人に楽しみを与える心で愛情の世界に生きる心であります。次に「衆生済度」の精神で先生は観音菩薩のような心で子女の教育をして行きたいというお心であつたと思えます。先生の教育に対する数々のお歌の中から一首をとつてみれば、そのお心がうかがわれます。

わが命あらんかぎりはをしへ草をしへてや  
まじ実を結ぶまで

また先生は教育家として現世だけでなく来世も教育家でありたいと願うほど生徒を愛し教育に熱心でした。辞世のお歌に、

おのれ来む世もまた教育家と生まれい  
でんことをねがひて

またも来て教への道の花ざくらやまところの春になさげや

とも詠んで居られます。女性の柔和の相については、常に女性は外は優しく内はしっかりして居らねばならぬと言われて居られました。

## (2) 施設の整備

昭和三十年（一九五五）は創立八〇年と李子校長米寿が重なる喜びに際会して、先の項でも記した「大綱」を具体的に推進して行くスタートの年となった。当初の目標は施設面において中学校と高等学校を分離し独立させることにあつたが、資金



昭和三十一年三月完成した二号館



二号館屋上からの眺め。前方は旧外務省研修所現在の拓殖大学

面で容易でないことが分かった。当面の方策として将来における目的実現の構想を中心としつつ、まず「教室の増加」を行う事にした。そして鉄筋コンクリート三階建て・建坪二九〇坪、普通教室六、研究室二、屋上使用可能で、ガラス窓を大きくした明るい校舎が二号館として完成した。昭和三十一年度の高校三年生が使用を開始した。昭和三十一年（一九五七）には割烹室の拡充（流し台・調理台・コンロ台ユニット一〇組など）や図書室の整備（照明度の増大と室内換気の機械化）が行われた。またこの年は、先の臨海施設鶴原寮について、北軽井沢に高原施設として浅間寮の落成を実現させた。その五年後には、教育活動を目的として浅間山麓に一〇万五〇〇〇平方メートル余の土地を購入し高原施設の充実をはかった。

大塚校地では花蹊、李子の居宅であつた成蹊館を移転して、そこに鉄筋ブロック壁体の音響効果に優れた体育館を新築した。同時に隣接する某氏所有の土地約六〇〇平方メートルを購入、バックネットの移転、正門通路脇バラ柵の撤去などと併せて運動場の拡張につなげた。

昭和三十九年（一九六四）には「教室増加」の一

表1 昭和三十三年年度の課程表

教科課程												
中 学 校					高 等 学 校							
学 年	1	2	3	計	学 年	科 目	課 程				計	
							I	II	A	B		C
国 語	5	5	5	15	国語甲	3	4	3	3	3	3	10
					国語乙	1	2	2	2	2	2	9
社 会	4	4	5	13	国 文	2	×2	×2	×2	2		2~6
					世界史	5						5
数 学	5	5	4	14	日本史		3	2	2	2	2	5
					社 会		2	3	3	3	3	5
理 科	4	4	4	12	人文地理					5		0.5
					数学I	6	3					9
音 楽	2	2	2	6	数学II		3					3
					数学III			5	5	2	2	2.5
図画工作	2	2	2	6	生 物	5						5
					地 学		5					5
保健体育	3	3	3	9	物 理			5	5	3	3	3.5
					地 理							0.5
家 庭	3	3	3	9	英語	1	1					2
					体 育	2	2	3	3	3	3	7
英 語	4	4	4	12	図 画	2	×2		2	2	4	2~8
					一 般	2	2					4
道 徳	1	1	1	3	食 物						5	0.5
					食 膳							
特別教育	1	1	1	3	英語	5	5	5	5	5	5	15
					職 (訓)			×2	2			0.2
計	34	34	34	102	修 計		×6	2		2		2~6
					計	34	34	34	34	34	34	102

1. × は、列れかを選択する。  
 2. 高専Aコースの科目のうち選択(2単位)と英文のうち列れかを選択する。

環として一号館別館三階を四階に建て増す工事が行われた。教室六、職員室一、研究室一が完成し、昭和四十年高度校二年生が使用を開始した。昭和四十二年(一九六七)には、外国人講師の採用に併せて、英語学習の充実、向上をはかるべく

五四ブースからなるL教室が完成した。

(3) 昭和三十年代のカリキュラム改訂

昭和二十六年(一九五二)の学習指導要領の改訂は、占領下の特別事情のもとに行われたものであった。独立後、まず小・中学校の社会科の改訂問題が起り、昭和三十年(一九五五)に道徳教育、地理、歴史教育の充実という観点から改訂が行われた。

跡見学園では昭和三十三年(一九五八)から道徳、特別教育活動が各一時間ずつ学年毎に設けられた。その一方で英語が一時間減、習字一時間がなくなったが、習字は昭和三十五年(一九六〇)に復活した。

その後文部省は、昭和三十三年三月の教育課程審議会の答申にもとづいて、小学校とあわせて中学校の学習指導要領を改訂し、同年十月文部省告示をもって公示した。改訂の要点は道徳の時間を設定すること、基礎学力の充実、地理・歴史教育の改善・充実を図ることなどである。この学習指導要領は、移行措置をへて昭和三十七年度から全面実施された。

高等学校ではまず昭和三十一年(一九五六)に教

教育課程表

中 学 校					高 等 学 校				
教科 科目	学年				教科 科目	学年			
	1	2	3	計		1	2	A	B
国 語	現代国語	3	2		2	2+2*			2+□2
	古典乙1	3	3						
	古典乙2				3	5			3
社 会	地理甲	4							
	日本史	2			2	2			2
	世界史B		5						
数 学	算術総合				2	2			2
	代数総合				2	2			2
	幾何総合				2	2			2
理 科	数学I	5					2		□2
	数学ⅡA		5*				2*		2*
	数学ⅡB		5*				2*		2*
音 楽	数学Ⅲ				6				
	物理A						3		3
	物理B					5			
英 語	化学甲	3	3						
	化学乙	3	2						
	地 学				2	2			2
体 育	保健体育	1	1						
	球技	2	2		3	3			3
	習字I								
書 道	書道I								
	書道II								
	書道III								
工 芸	工業I	2	2				2*		2
	工業II								
	工業III								
家庭科	家庭科I	2	2						
	食物I								□4
	家庭科B	5	5		6	6			6
学 習 活 動	英語B	1	1		1	1			1
	習字II								
	習字III								
計	34	34		34	34		34	34	

(注) ○×印はいずれか一科目、□、□印は二科目か三科目を選択する。

表2 昭和四十年年度のカリキュラム

育課程の改訂が行われた。この改訂は、高等学校教育により計画性を持たせる観点から、従来の広範な選択制を廃し、教育課程の類型を設けるとともに、必修教科、科目を増やして教養のかたよりを少なくすることをおもな趣旨とする。

跡見学園ではこれに基づいた教育課程が昭和三十一年の一年生から施行された。表1は昭和三十三年(一九五八)の課程表であるが、高校二年まで

は単一のコースとなり、高校三年は四コースに分れている。ただし翌昭和三十四年(一九五九)にはほぼA・DコースをA・Bコースとし、B・Cのコースを統合し「職業科」を廃してBコースコースにまとめて全体で三コースとしている。

文部省ではその後昭和三十五年(一九六〇)十月に高等学校学習指導要領を公示した。これは小学校、中学校、高等学校にわたって教育課程の一貫性を持たせるとともに、昭和三十一年改訂の趣旨をさらに徹底させるものであった。この指導要領にもとづく教育課程は、昭和三十八年度の第一学年から学年進行で実施された。

跡見学園では、昭和三十三年十月に教育課程委員会が設けられ、昭和三十三年公示の中学校学習指導要領および昭和三十五年公示の高等学校学習指導要領にもとづいてカリキュラムの改訂を行った。表2は、高校三年までのすべての学年が新课程となった昭和四十年年度のカリキュラムである。

中学校の各教科の三学年を通しての総時間数を先行のカリキュラム(たとえば昭和三十五年度)とくらべると、音楽・美術が各六時間から五時間に減っているのに対して、英語が一三時間から一五時

間に増えている。

高等学校では、従来通り高校三年がABC三コースに分れており、Aコースは数Ⅲ、物理Bを履修する理科系、Bコースは国語の多い文科系、Cコースは食物Iを選択し、数学の少ないコースと、従来よりもコースの性格は一層鮮明になっている。また全体的に教科選択の幅も幾分狭くなっている。

#### (4) 修学旅行

戦後の混乱の中、学校施設の復興と併せて、校外活動が活発に行われていたことを背景に、昭和二十四年（一九四九）の秋には早くも高校三年生で修学旅行が復活した。東京駅から夜行列車に揺られて、京都・奈良への出発であった。食糧事情が悪いため、各自が米を持参して列車二泊、旅館三泊の旅行であった。昭和三十三年（一九五八）には実施学年を高校二年生に移し、三列車に分乗する形で東京駅を早朝に出発して、五泊六日の日程を有効に活用することになった。

同年代には「ひので」「ぎぼう」といった修学旅行専用列車を利用したこともあった。

昭和四十年（一九六五）三月一日、前年の東京オリンピックに併せて開業したばかりの東海道新幹

線を使用した、日本で最初の修学旅行が本校によって実施された。これが当時のマスコミに大きく取り上げられ、TVニュースや新聞などで報道された。

日本の伝統文化を学ぶ場として、京都・奈良に集約する形で、グループ別自由研究を取り入れながら、日昇別荘や多武峰観光ホテルを拠点に五泊六日の旅行が続けられた。

昭和五十年（一九七五）、山陽新幹線の全線開通が時間距離を短縮させたこともあって、平和学習を積極的に取り入れ、広島まで足を延ばすことにした。平和記念資料館の見学や、被爆体験者のお話を聞く機会などを通して、平和について深く考える礎になった。平成十四年度からこの平和学習は、復活した中学三年生の修学旅行として実施されることになった。

遡って中学校の修学旅行は昭和二十六年（一九五一）上高地を皮切りに、東北方面の旅行がしばらく続いたが、昭和三十六年（一九六一）旅館の食事が原因で発生した食中毒の影響で、翌年からは伊豆・伊勢志摩などの各方面を年度によって替えて実施した。



跡見生の新幹線での出発を報じる、当日の東京新聞夕刊紙面

- 昭和四十五年(一九七〇)以後は、学校行事の見直しのなかで中学校の修学旅行は中止となり、代わって自然教室として実施されることになった。
- (5) 横田正次校長の就任

昭和十七年(一九四二)跡見女学校に奉職して間

もなく、召集され戦地に赴いた。昭和二十三年(一九四八)再び跡見に戻り、生徒部長・教務部長・主事の要職を経て、昭和四十七年(一九七二)九月、飯野校長の後をうけて四代目校長として就任した。慈悲に富んだ人柄で日ごろの訓話や文章に、そのことがよく現れていた。昭和五十年(一九七五)の創立一〇〇年を記念する生徒会誌『跡見』に寄せられた「創立百年に思うこと」の一文を掲げる。

跡見が今日の名実を成すに至るまでの百年の間には、幾多の困難な事態があり、しかもこれを克服された偉大な成果を挙げられたのは、花蹊先生をはじめとして、余多旧師の聡明な御見識と教育愛、またこれをよく理解し支えられた先輩各位の英知と努力の賜物であり、私どもは心からの敬意を表さなければならぬ。

戦後焦土のなかから立ち上がった我が国は、国民の努力によって、経済の驚異的な発展をとげたが、ものの豊かさを求めるに急で、豊かな自然と心の素直さを失うに至った。人はまず己を主にして、人と人とのふれあいを忘



れ、自らの主張を尊いものとして、これと相反するものを排撃し、独善と傲慢の中に己を失った。物を得て心を失い、物の乏しきにおののき、自然を失った心の澱に愕然とする。すべては求めすぎたがための反動であり、人は今これを混迷の世という。

莊子に「美しきことの成るは久しきに在り、悪しきことの成れるは改むべからず」とある。美しいことが成就されるには長い時間を要し、悪いことは一度できあがると、容易に改めることはできないのである。また同じく、「迹を絶つは易きも地を行く(あるく)こと無きは難し」とあり、混乱した世俗の風潮を真っ向から否定し、世を逃れることは必ずしも難しくはないが、混迷した世俗に生きながら、俗塵に汚されず、自己を傷つけずに生きぬくことはむずかしい。

世の人は、跡見の伝統を称え、これを高く評価する。生徒会活動も、あなた方がやがて平和な社会人としての基盤となる道徳と、世の中の秩序を維持するための規律を確立し、自然を守り育て、乏しきに耐えて物を大切に

する、思いやりのある人間性を培うための基礎作りにある。百年の伝統を、己の肌で受けとめた私共は、この栄光を次の百年に引継ぐための決意を固めなければならない。

#### (6) 自然教室のはじまり

都会生活に埋没する生徒達が、少しでも自然に接し、心身共に健やかで、幸せな女性に育てあげたいという李子校長の願いを受けて、飯野保主事が昭和二十八年(一九五三)のある日、機会を得て鶴原の地を訪れた。その折、人の素朴さと「理想郷」という地名そのままの自然の仙境に感じ入って、そこに四七七坪の土地を得たという。直ちに寮の建築にとりかかり昭和三十年(一九五五)七月十日に落成した。七月二十日から八月十三日まで短大生・高中生徒を対象に臨海指導が行われた。八月十五日から二十五日まではソフトボール部、バレーボール部、卓球部の合宿訓練で使用された。昭和三十二年(一九五七)からは、中学一年の夏季行事・臨海学校として学級ごとに三泊四日のコースで活用されることになった。

一方、高地にも教育活動の適地を求めていたところ、昭和三十二年北軽井沢高原に四〇〇〇坪の



土地を得た。白樺やから松に囲まれて、木造平屋  
コテージ風の建物四棟が林間学校にふさわしい施  
設として完成した。昭和三十四年（一九五九）から  
中学二年の夏行事・林間学校として学級ごとに

三泊四日のコースで利用した。さらに昭和三十七  
年（一九六二）には、寮の南約四キロメートルほど  
離れた所に、教育活動の多角的な運営を目的とし  
て、三万二〇〇〇坪（十万五〇〇〇平方メートル）  
の土地を購入した。当時は樹木の多くは低木で、  
南に大浅間の偉容が迫り、遠く北には白根・吾妻・  
四阿の峻峰がつらなる雄大な景観が展望できるフ  
ールドであった。社会科では、活火山浅間山を  
目の前にして火山活動や地形などの学習。理科で  
は、誕生間もない大地に芽生えた植生から始まる  
サクセションの学習など、多角的に活用された。  
この二つの行事が、昭和四十八年（一九七三）か  
らの「自然教室」の始まりとなるのである。

#### (7) カウンセラー教員の配置

戦後の中学校・高等学校の教育にはアメリカの  
影響が大きくあつて、生徒指導（ガイダンス）が学  
校教育の重要な任務として取り上げられた。本校  
では昭和四十年（一九六五）に、加藤幸雄教諭を東  
京教育大学の井坂行雄教授の教室に派遣して、一  
年間の研修をさせたのが、カウンセラー室設置の  
始まりである。

開設と同時に多くの生徒が〈相談〉に部屋を訪

れた。「交友に関するもの」「将来・進路に関するもの」「学校生活に関するもの」「自己に関するもの」「家庭に関するもの」「生活態度に関するもの」「異性に関するもの」などの〈相談〉が主のものであった。面談は予約制だったが、待ちきれずに、昼休みなどに来談する者もいた。

加藤は、「自分が精一杯生きよう、成長向上しようという意欲のある人や、苦悩や絶望にとらわれて涙して訪れる人、そのかたちこそ異なれ、真剣に“生”にとりくんでいる人がいる。カウンセラー室は指導したり、教えたりすることを主としてはいない。あくまで相談である。自分の中にある問題を明確化し、相談の中から自分が自分のことを自分でわかるように援助するのがカウンセラー室の仕事である」と述べている。

その後、各学年に一人のカウンセラー教員を配置することを目標に、毎年教育大での研修が続けられた。

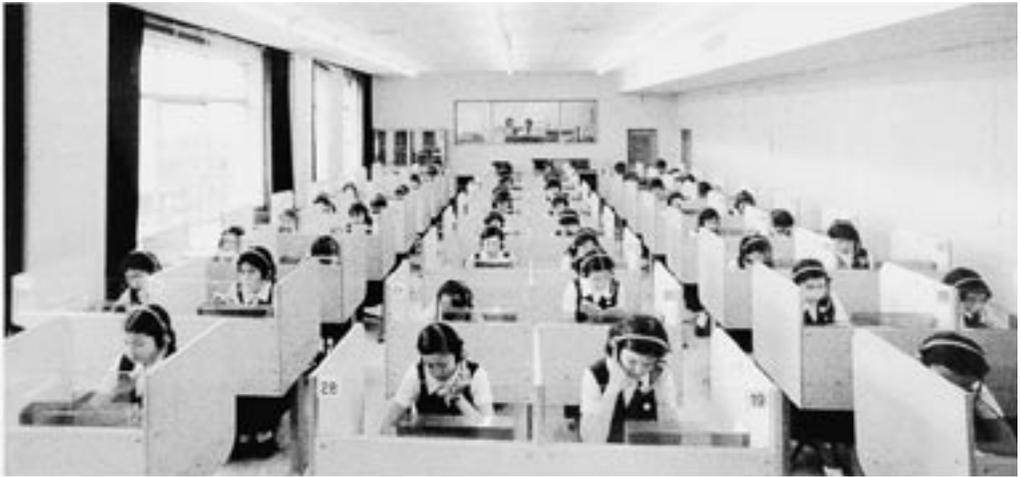
#### (8) 外国人講師の採用

昭和四十一年(一九六六)には、日本が高度経済成長の波に乗って、物の豊かさに浸っている時代であった。本校においては、戦後最初の外国人講

師を採用した年となる。外国人講師の採用は、教科としての英語の指導のみならず、国際化時代の視点に立った幅広い物の見方が教授された。昭和四十七年(一九七二)三月まで教壇に立ったアン・ヘーリングは、歴史教育の中で、世界平和を築くために欠かせない「現代史」の学習不足を指摘したうえで、跡見生に対し次のように述べている。

蚕があなたか繭のなかにいるようにここで勉強している皆さん、そのあなたかくて甘い雰囲気以外のことを、または皆さんの知っている世界の中にある物足りないことをよく理解していないなら、これから社会人になつてある意味では社会の指導者として活躍する時期がきた時にその欠陥が害になるでしょう。社会福祉問題、婦人問題、人種差別問題、自然保護及び公害問題、選挙それらをしっかりと意識して欲しいのです。温室育ちをやめてこれから一人前の人間として、この世の矛盾を少しでもなくすよう努力して下さい。

与謝野晶子と花蹊先生は、ある意味では全く対照的な女性でしょう。しかし、大変な努



昭和四十二年完成したL.L教室で学ぶ生徒たち

力家であったことは共通して  
います。花蹊先生のような思想で  
も、晶子のような思想でも、あ  
るいは全く違う思想でもむろん  
自由です。とにかく思想を持つ  
て積極的に行動するようにして  
下さい。

〔跡見〕一六号

昭和四十二年(二九六七)にはソニ  
ーの機種を使用した五十四のブー  
スからなるL.L教室が完成し、外国人  
講師の招聘と合わせてその後の英語  
教育に見るべき成果をあげた。

#### (9) 生徒会最初の選挙

昭和二十五年(二九五〇)生徒会の  
発足以後、会則・組織の整備が委員  
の自治意識の向上とともに、能動的  
に行われるようになってきた。その  
なかで、会長・副会長選挙の変遷に  
ついて以下に記しておく。

昭和二十五年(二九五〇)

ホームルーム生徒委員とクラブ生徒委員から  
なる合同協議会で互選する間接選挙制

昭和二十九年(二九五四)

運営委員会・クラブ委員会・監査委員会の各  
委員長と各ホームルーム委員長とからなる審  
議委員会でも互選する間接選挙制

昭和三十三年(二九五八)

会則改正により会員による立候補制を原則と  
したが、結果は中央委員会で互選する間接選  
挙制

昭和三十四年(二九五九)

直接選挙制を採用しようとする気運が高まっ  
たが、時期尚早として、学年役員会での互選  
による間接選挙制。しかし当時の会長から、  
自分が会員一人一人から本当に支持されてい  
るか否かという疑念が表明されたことを受け  
て、直接選挙制を導入する動きが活発になっ  
た。

昭和三十六年(二九六一)

十一章四十九条からなる選挙規則と選挙管理  
委員会細則を制定し、推薦立候補制による直



接選挙制に改めた。

該当学年における選挙権所有者の規定数の推薦署名を得た立候補者が、各自の所信をもつて立候補し、会員が直接会長・副会長を選挙する方法が初めて採られた。

この昭和三十六年の選挙制度ができ上がった頃は、他校からの問い合わせも多く、立案・作成した生徒達も立派なものができたと誇りに思った。しかし、四、五年にして、立候補者の減少という大きな壁にぶつかることになった。

### (10) 生徒の活動A

以下に生徒の活動の記録を校外で高く評価されたもののみについて列記してみた。ここに記したもの以外にも優れた活動は多々あるが、次の機会までに整備したものを作成する足がかりになればと思い列記するにとどめた。昭和三十年(一九五

五)から昭和四十五年(一九七〇)までをA、昭和四十六年(一九七二)から昭和六十年(一九八五)までをBの項に記した。

なお、ソフト部はソフトボール部、テニス部はソフトテニス部、バスケット部はバスケットボール部  
◎印は個人を表している。

昭和三十年(一九五五)

テニス部 全日本高等学校軟式庭球選手権大会東京代表

ソフト部 国民体育大会予選南関東大会東京代表

昭和三十一年(一九五六)

ソフト部 全日本高校女子ソフトボール選手権大会東京代表

昭和三十二年(一九五七)

バスケット部 東京都高等学校バスケットボール新人戦優勝

繊維工芸部 日本手工芸文化協会会長賞受賞  
(内藤久美子)

昭和三十三年(一九五八)

ソフト部 私学祭 中学の部で優勝

昭和三十四年(二九五九)

卓球部 全国高等学校総合体育大会東京代

表(水越さくえ)

国民体育大会東京代表(中村良子)

ソフト部 東京都中学校ソフトボール選手権

夏季大会優勝

昭和三十五年(二九六〇)

卓球部 全国高等学校総合体育大会東京代

表

国民体育大会東京代表(中村良子)

ソフト部 私学祭 全国大会東京代表

昭和三十六年(二九六一)

理化部物理班 日本学生科学賞中央審査一等

賞

卓球部 全国高等学校総合体育大会東京代

表(中村良子・浜治恵)

国民体育大会東京代表(中村良子)

昭和三十七年(二九六二)

卓球部 全国高等学校総合体育大会東京代

表(浜治恵)

国民体育大会東京代表(浜治恵)

バスケット部 全国高等学校総合体育大会東京代

表

理化部化学班 日本学生科学賞東京都審査最

優秀賞

昭和三十八年(二九六三)

卓球部 全国高等学校総合体育大会東京代

表(浜治恵・加藤マリ)

全国高等学校総合体育大会(シングルの部

浜優勝)

バスケット部 関東高校女子バスケットボール選

手権優勝

理化部化学班 日本学生科学賞東京都審査最

優秀賞

昭和三十九年(二九六四)

バスケット部 全国高等学校総合体育大会東京代

表

昭和四十年(二九六五)

バスケット部 全国高等学校総合体育大会ベスト

8に入る

◎ 全国教育美術展デザイン部門特選

入賞

昭和四十一年(二九六六)

バスケット部 東京都高等学校バスケットボール

## 観世寿夫の指導

中学・高校生の活動としては珍しい、謡曲仕舞部というクラブがある。

花蹊・李子もたしなんだといわれる演能の世界を識るクラブである。昭和三十年代初め、縁あつて観世寿夫という著名な指導者に巡り会うことができ、故人とられた今日でも師の教えは脈々と引き継がれている。

先年、長い間顧問であつた徳住篤がまとめた追悼文集がある。その中に師が生徒に贈つた「真の花」と題した一文がある。

『風姿花伝』の中で世阿弥は、時分の花

とか、盛りの花とか、老後の花とか色々な

表現を用いています。これらはその年齢と

か芸位による花の種類を現したのですが、

生涯にわたつて散ることのない本当の花を

「真の花」と言っています。

能における芸位の問題だけでなく、人生

においても、様々な花をふまえて「真の花」

に到達することが必要と考えます。

とあります。我々地球人は何を目標に活動を続

けているのだろうか。今こそ、生涯にわたつて

散ることのない「真の花」を求めた歩みをして

行かなければならない時代であると思うのだが。

### 新人戦優勝

化学部 日本学生科学賞東京都審査優秀賞

昭和四十二年(一九六七)

バスケット部 全国高等学校総合体育大会東京代

### 表

化学部 日本学生科学賞東京都審査最優秀

### 賞

◎ 日本高等学校英語弁論大会優勝

(富田千勢子)

◎ 全国読書感想文コンクール入選

(野口直子)

昭和四十三年(一九六八)

バスケット部 高等学校関東大会Aブロック優勝

全国高等学校総合体育大会東京代



昭和四十年八月、軽井沢で合宿中、皇太子殿下（現天皇陛下）と談笑する卓球部員と顧問

表

化学部

日本学生科学賞東京都審査最優秀

賞

昭和四十四年（二九六九）

バスケット

全国高等学校総合体育大会五回出場により東京都高校体育連盟より表彰を受ける

校体育連盟より表彰を受ける

昭和四十五年（一九七〇）

卓球部

関東高校卓球選手権大会東京都代表

（安藤裕子・中村利津子）

化学部

日本学生科学賞東京都審査最優秀賞

全日本スクールデザイン作品メキシコ・中南米展協会長賞受賞

◎

全日本スクールデザイン作品メキシコ・中南米展協会長賞受賞

長賞受賞

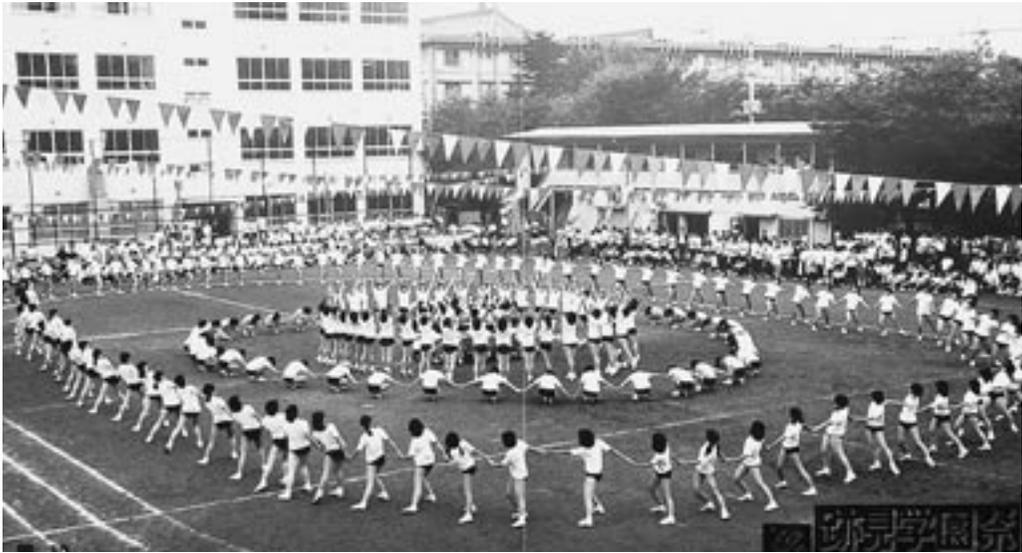
(II) 運動会

昭和二十四年（一九四九）榎の大木を真ん中にした中庭に、チョー

クで線引きをして始まったのが戦後最初の運動会であった。昭和二十九年（一九五四）、校庭の拡張に併せて、それまで秋に行われていた運動会が春に挙行されることになった。その年は短期大学学生も一緒に参加し、盛大に行われた。演目の中でも、各学年によって行われる集団演技（ダンス）は、日頃の生徒の体育活動に加え、創造性・協調性を培う絶好の機会となった。毎年最終の演目となる高校三年生の演技は、演じる者だけでなく、観ている者を魅了する熱気が感じられ、終演と同時に校庭をしばしの感動がひた走るのである。

昭和三十二年（一九五七）からは、伝統校に学ぶ乙女たちの躍動美を示そうと「仮装行列」が登場した。趣向を凝らした出し物は、時に教員の参加もあって満場の喝采を浴びた。この頃、入場行進や選手宣誓なども取り入れられ、運動会の開始をより厳かなものにした。

昭和四十三年（一九六八）には、高校三年生の吉田和代・村井美和子・松本えり子の作詞、磯野恵美子の作曲による「運動会の歌」が、薫風そよぐ大空の下で斉唱された。この歌は体育祭として秋に行事が移ってから、若さみなぎる校庭で歌い



継がれている。「学級別仮装行列」は、昭和四十八年（一九七三）「学園祭」として文化祭・体育祭が、秋の同時期に実施されるようになって中止された。代わって、一〇〇〇メートル競走・五〇メートル競走といった個人競技が種目の中に取り入れられ、生徒一人一人の個性が大いに引き出された。

## (12) 音楽会

本校の教育目標の一つに「豊かな情操をもつこと」がある。素直に「良いものは良い」「美しいものは美しい」と思える人間に育むために、様々な行事がある。昭和四十五年（一九七〇）六月十七日文京公会堂で始められた「音楽会」もそのひとつである。平成十七年（二〇〇五）で三六回目を迎える。毎年質の高い本物の音楽を鑑賞することで、

豊かな情操の一面が養われてきた。ときには生徒自身が舞台にあがって演ずることもあり、創造の機会も与えられた。

ここに初期のプログラムの一覽を掲げて当時を振り返ってみる。

世界的フルート奏者ピエール・ランパルや、日本を代表するバイオリン奏者江藤俊哉、ピアニ奏者園田高弘等の名前がある。

## (13) 「紫のあと」の上演

昭和四十三年（一九六八）初頭、明治百年「道をきりひらいた女性展」が新宿の京王百貨店で開催された。そこには、跡見花蹊をはじめ、三宅花圃・森律子ら跡見関係者のものも多く展示された。

音尾事務局長は松竹本社を訪ねて「花蹊伝」の劇化をしたいという学校の意向を伝えたところ、了承され当時の中屋演劇部長のもとで企画が進められた。同四十四年、矢田弥八作演出「紫のあと」として新橋演舞場で上演されることとなった。作者は制作にあたって「欠点が見出せない、完成された人ほどドラマになりにくい」と言って大変ご苦労されたようである。しかし清書されたものは、一二〇枚三幕六場・一時間四五分に及ぶ大作とな

昭和33年以降の学年別集団演技の演目一覧表

	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校2年	高校3年
昭和33	仰ぐ太陽	ミリタリマーチ	縄跳び	花畑の朝	花火	さくら変奏曲
昭和34	メイボール	風を呼ぶ	聖火をかざして	リズム体操	青葉の笛	美しき青きドナウ
昭和35	メイボール	1と2	五色の珠	この土	ドナウ河の漣	アルプスの瞳
昭和36	中止	中止	中止	中止	中止	中止
昭和37	オリンピックの歌	メイボール	チュールリップのワルツ	ローレライ	青春の賦	春の海
昭和38	東京オリンピック	花をたたえて	森のあした	泉の歌	六段に寄せて	コチロン
昭和39	クワイ河マーチ	メイボール	花畑の朝	リズム体操	フラワー日本	黒田節
昭和40	漣	メイボール	フラッグダンス	リズム体操	ベルシャの市場にて	荒城の月幻想
昭和41	みんなで楽しく	メイボール	田毎の月	タンホイザー行進曲	あかつきの海	吉野の春
昭和42	楽しく踊ろう	メイボール	旗の体操	胡蝶の夢	組体操	海のあけくれ
昭和43	楽しく踊ろう	メイボール	プロムナード	花の歌	組立体操	須磨の浦
昭和44	青い山脈	花をたたえて	組体操	花の輪	タンプリング	ダンス今昔
昭和45	フォークダンス	メイボール	旗の体操	五色の珠	リズム縄跳び	荒城の月幻想
昭和46	フォークダンス	メイボール	プロムナード	フラワー日本	組立波状運動	春を想う
昭和47	フォークダンス	メイボール	二人組体操波状運動	花火	組立体操	竹打つ音
昭和48	フォークダンス	メイボール	集団徒手体操	青春	組立体操	須磨の浦
昭和49	フォークダンス	花をたたえて	徒手体操	花の輪	ベルシャの市場	荒城の月幻想
昭和50	フォークダンス	ダンスの今昔メドレー	花畑の朝	タンホイザー行進曲	組立波状体操	春の海
昭和51	フォークダンス	メイボール	1と2	そーらんくずし	ベルシャの市場にて	吉野の春
昭和52	旗の体操	花をたたえて	二人組体操波状運動	乙女の祈り	マスゲーム	須磨の浦
昭和53	フォークダンス	円と線の構図	波状運動	田毎の月	ベルシャの市場にて	海のあけくれ
昭和54	組体操波状運動	花をたたえて	五色の珠	体育祭79	碧空—バラが散った日	荒城の月幻想
昭和55	組体操波状運動	噴水	ファースト	花火	ベルシャの市場にて	春の海
昭和56	青い珊瑚礁	花をたたえて	ニューヨーク	創作—夏・冬	Gather Way 動き出せ	吉野の春
昭和57	組体操	花をたたえて	ラブミーテンダー	空の遊び	ベルシャの市場にて	風紋
昭和58	パレード	花をたたえて	カルメン前奏曲	Hooked on Ciassic	浜辺の智恵子	ボレロ
昭和59	響け太鼓	花をたたえて	気ままに REFRECTION	シルクロード幻想	ベルシャの市場にて	宇宙 Space Odyssey W
昭和60	棒体操	花をたたえて	カドリール	Assosiation	ベルシャの市場にて	荒城の月幻想
昭和61	スペース	花をたたえて	美しき青きドナウ	Variation	六段に寄せて	遙かなる世界へ
昭和62	フォークダンス	花をたたえて	組体操「青空に」	乙女の祈り	ベルシャの市場にて	荒城の月幻想
昭和63	組体操	花をたたえて	若い時代	Girls Lets Dance	ベルシャの市場にて	ボレロ
平成1	組体操・ドミノ・波	花をたたえて	パレード '89	なし	ベルシャの市場にて	須磨の浦
平成2	組体操	花をたたえて	美しき青きドナウ	カドリール	ベルシャの市場にて	荒城の月幻想
平成3	翔べ大空へ	花をたたえて	ファースト	森の風景	ベルシャの市場にて	カルミナ・ブラーナ
平成4	旗の体操	花をたたえて	五色の珠	ドナウ河の漣	ベルシャの市場にて	荒城の月幻想
平成5	オーレチャンプ	花をたたえて	美しき青きドナウ	新竹打つ音	ベルシャの市場にて	ボレロ
平成6	旗の体操	花をたたえて	乙女の祈り	華	ベルシャの市場にて	Female—天地創造
平成7	青い珊瑚礁	花をたたえて	パレード '95	ターミネーター	ベルシャの市場にて	ボレロ
平成8	旗の体操	花をたたえて	体育祭 '96	六段によせて	ベルシャの市場にて	カルミナ・ブラーナ
平成9	オーレチャンプ	花をたたえて	美しき青きドナウ	組立体操・波状運動	ベルシャの市場にて	天地創造
平成10	輪になって踊ろう	花をたたえて	竹打つ音	ブロック移動・人文字	ベルシャの市場にて	ボレロ
平成11	翔べ大空へ	花をたたえて	カドリール	A明るくT楽しくG元 気よく	ベルシャの市場にて	天地創造
平成12	5.6.7.8	花をたたえて	踊ろう！ジギスカン	六段によせて	ベルシャの市場にて	カルミナ・ブラーナ
平成13	Believe	花をたたえて	ロック・オン・ ザ・クロック	ピンクレデイ2001	ベルシャの市場にて	天地創造
平成14	オーレチャンプ	花をたたえて	旗の体操	美しき青きドナウ	ベルシャの市場にて	ボレロ
平成15	響け太鼓	花をたたえて	カドリール	ロックソーラン節	ベルシャの市場にて	天地創造
平成16	旗の体操	花をたたえて	カドリール	ロックソーラン節	ベルシャの市場にて	大和祭宴

「メイボール」と「花をたたえて」は同じ演技内容



オーケストラとともに演じる生徒

### 音楽会の初期のプログラム

期 日	内 容	場 所
45. 6.17	バリトン歌手田島好一の独唱を鑑賞。 第一回を記念して中高生・短大生・大学生の独奏、演奏など	文京公会堂
46.12. 1	読売日本交響楽団の青少年のための名曲コンサート ベートーベンのピアノ協奏曲第5番	東京厚生年金会館
47.12. 5	読売日本交響楽団の青少年のための名曲コンサート ベートーベンの交響曲第5番	東京厚生年金会館
48.11.30	読売日本交響楽団の青少年のための名曲コンサート 指揮ペーター・シュバルツ。メゾソプラノ梶井裕子（紫朋会）	東京厚生年金会館
49.10.19	読売日本交響楽団の青少年のための名曲コンサート 指揮若杉弘。バイオリン ネビル・タウィール	東京厚生年金会館
50.11. 5 創立百年 記念として	読売日本交響楽団の青少年のための名曲コンサート 第1部指揮セルジュ・ボド バツハの管弦楽組曲第3番 ほか 第2部ジャン・ピエール・ランパル フルーツリサイタル	東京厚生年金会館
51.11. 8	読売日本交響楽団の青少年のための名曲コンサート 指揮三石精一 音楽童話ピーターと狼 朗読岸田今日子	中野サンプラザホール
52.11.14	読売日本交響楽団の青少年のための名曲コンサート 指揮ラディスラフ・スロバーク。ピアノ高橋アキ	東京厚生年金会館
53.11.28	アムステルダム・シntagマ・ムジクムの演奏 ペトルッチの1501年の曲集より	日比谷公会堂
54.11. 2	二期合唱団青少年コンサート オペラ カルメン ハイライト 高校音楽選択者出演	東京文化会館
55.11.29	日本ニューフィルハーモニー管弦楽団 指揮福田一雄 バイオリン江藤俊哉 メンデルスゾーン バイオリン協奏曲	新宿文化センター
56.11.24	東京都交響楽団 指揮佐藤功太郎 ピアノ園田高弘 ベートーベン ピアノ協奏曲5番	東京文化会館



「紫のあと」 中央が花蹊を演じる市川翠扇

った。出演者は新派の幹部俳優、市川翠扇・安井昌二・金田竜之助ら錚々たる顔触れであった。中には全校生徒の鑑賞もあつて、二五日間に亘る興業は成功裡に終わった。千秋楽には関係者に大入りの祝儀袋が配られた。

教えきて 花のこころの面影を

しのぶ夕べは 紫のあと

は上演後の作者の歌である。

付記すると作者、矢田弥八の妻・娘は共に本校卒業生。俳優、安井昌二の妻小田切みきも本校卒業生であつたことは、誠に縁深いものがあつた。

### 3 教育内容の充実

#### (1) カリキュラムの変遷

昭和三十年代、科学技術の革新や経済の高度成長とともに、国民の生活や文化水準も著しく向上した。教育界においては、中学生の高等学校進学急増という状況が見られ、このような事

態に対処するため教育内容の刷新・改善を図る必要があり、文部省は教育課程審議会の答申に基づいて学習指導要領の改訂作業を進め、中学校に関しては昭和四十四年四月に公示した。

改訂の基本方針は、(1)望ましい人間形成の上から調和と統一のある教育課程の編成を図ること、(2)指導内容を基本的事項に精選、集約すること、(3)生徒の能力、適正等に応ずる教育の徹底を図ること、(4)始業時間について弾力的な運用を図れるようにすること、となつている。この指導要領は昭和四十七年度から全学年同時に実施することとされた。

高等学校では進学率の上昇により生徒の能力・適正・進路等が著しく多角化し、学内外の事情が大きく変化した。ここに将来を見通して高等学校の教育内容を改善する必要性が生じ、昭和四十五年十月新指導要領を公示した。改訂の要点は次の通りである。(1)必修教科、科目の種類およびその単位数を削減、(2)「数学一般」の女子必修化、芸術の必修単位数の増加。この教育課程は同四十八年度の第一学年から実施されることとした。

これらの指導要領によつて改訂された跡見学園

のカリキュラム(表1)を見ると、まず中学校においては各学年の総時間数が三五時間から三四時間に減っている。特に削減されたのは社会科で、三年間総時間数が一三時間から一〇時間に減り、学級活動がなくなった。一方数学、美術、保健体育が各一時間ずつ増えている。

高等学校では高校三年生のコースが細分化されており、Aコースは理科系、B<sub>1</sub>コースは食物Iを履修、B<sub>2</sub>、B<sub>3</sub>コースともに文科であるが、B<sub>3</sub>は数学演習、理科などを履修できるコースである。コースのきめが細かくなっているとともに、各コースの性格は一層鮮明になっている。

また高等学校の総単位数は従来三四単位均一であったのに対し、高校一年生、二年生はともに三三単位となり、高校三年生はコースないしは科目の選択次第で二九単位に引き下げることができる。

昭和五十年代には学習指導要領の大幅な改訂が行われた。中学校の新指導要領は昭和五十二年(一九七七)七月二十三日に公示され、移行期間を経て昭和五十六年度から全面実施されることになっていた。今回の改訂の要点は、(1)道徳教育や体育を一層重視し、人間性豊かな児童生徒の育成を図

ること、(2)各教科の基礎的・基本的事項を確実につけられるようにすること、(3)ゆとりのある充実した学校生活を実現するために各教科の標準時間を削減し、地域や学校の実態に即してその運用に創意工夫を加えることなどであったが、特にいわゆる「ゆとり教育」の提唱は、教育界内外の注目を集めた。

高等学校の新指導要領は昭和五十三年(一九七八)八月三十日に公示され、昭和五十七年(一九八二)四月入学の第一学年から学年進行で適用することとなっていた。この指導要領は次のような基本方針に基づいて作成された。(1)学習指導要領を大綱的基準にとどめ、学校の主体性を尊重して教育課程の編成と実施についてできる限り学校の自主的判断に委ねることとした。(2)必修科目の単位数を大幅に削減し、選択科目を中心とする教育課程が編成できるようにした。(3)ゆとりのある充実した学校生活を送れるように卒業に必要な単位数の削減、授業時数等の扱いの弾力化、各教科・科目の内容の精選などを行った。(4)勤労の喜びを体得されるとともに体育・徳育を重視する。

跡見学園では、昭和四十七年(一九七二)三月二

表1 昭和五十二年(一九七七)のカリキュラム

学年	1	2	3	計		
国語	5	5	5	15		
社会	4	3	3	10		
数学	4	5	5	14		
理科	4	4	4	12		
音楽	2	2	1	5		
美術	2	2	2	6		
保健体育	3	3	4	10		
家庭	3	3	3	9		
英語	5	5	5	15		
道徳	1	1	1	3		
習字	1	1	1	3		
計	34	34	34	102		
教科 科目	学年 コース		高 Ⅱ			
	高Ⅰ	高Ⅱ	A	B <sub>1</sub>	B <sub>2</sub>	B <sub>3</sub>
現代国語	3	3	2+②	2+2	2+2	2+2
古典Ⅰ乙	2	3				
古典Ⅱ				3	3+3	3
倫理社会			2	2	2	2
数学Ⅰ	3		2	2	2	2
日本史			4	4	4	4
世界史		4				
数学Ⅰ	6					3 (国語)
数学ⅡA						
数学ⅡB						
数学Ⅲ			6			
生物Ⅰ	3					
化学Ⅰ	3					
物理Ⅰ		3				
地学Ⅰ						①
化学Ⅱ			3			①
生物Ⅱ				②	②	②
保健体育	3	2	3	3	3	3
家庭		2				
英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ						
英語Ⅳ	2	2		3	3	①
英語Ⅴ						
家庭一般	2	2				
食物Ⅰ				4		
英語B	5	6	6	4	6	4
ホームルーム	1	1	1	1	1	1
計	33	33	32-29	33-30	34-31 32-29	34-31 34-31 32-29

十二日に教育協議会より校長の諮問に答えて、本学園の教育課程のあり方について実現可能なものの方角付けについて検討した結果の答申がなされた。その中で本学園の「期待する人間像」の形成に関して「知情を高め、情操をみがく。自らを重んじ責任を果たす。すこやかな身体と合理的的精神

を養う。勤労を尊び奉仕につとめる」の四か条が提示され、直接教育課程に関しては、中学・高校の一貫性をより強く打ち出すことが主張されている。

具体的なカリキュラムの編成に関しては、昭和五十年(一九七五)五月十五日に教育課程プロジェクトチームが編成され、昭和五十一年(一九七六)三月に答申が出された。その要点は、(1)週当たり総授業時間数の減少を計り、生徒の負担を軽減する。(2)中学校においては、国語・数学・英語の三教科の基礎学力の充実を計る。(3)高校においては進路と能力にあったコース選択性を採用する。そのためにもコースの性格を明確にする。(4)コース制の効果をより高めるため高校二年より実施する。

その後教務係を中心に検討が重ねられ、その結果、表2のカリキュラムが編成された。このカリキュラム表において、特に高校二年、三年の各科目において選択の幅が広いのが特徴であり、学級編成、時間割編成には困難が付きまとい、そこで選択の科目を組み合わせたいくつかのパターンをつくり、それを生徒に選択させるパターン化なども試みられた。

表2 昭和六十年（一九八五）のカリキュラム

科目		1		2		3		4		備考
コース		Aコース		Bコース		A1コース		B1コース		
必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	
国語	1	1								高3で選択する科目は高2で履修済みであり、高3で履修していない科目は選択出来ない。（但し日本語は除く）高3の他の選択はそのうち1科目。
英語	1									
数学	1									
理科	1									
社会	1									高3で選択する科目は高2で履修した科目を除く。
保健体育	1									
芸術	1									
総合学習	1									
英語	2									高3A、Bコースの+号は同一科目の履修単位。
数学	2									
理科	2									
社会	2									
英語	3									選択は2科目4単位を履修とする。高3選択のある単位は高2で履修した科目を履修することができない。
数学	3									
理科	3									
社会	3									
英語	4									高3A、コース定員の選択はそのうち1科目。
数学	4									
理科	4									
社会	4									
必修科目合計		28	4	27	4+8	28	8+12	28	10+14	
選択科目合計										
合計		28	4	27	12+8	28	20	38	24	

(2) 校舎増築

念願であった跡見大講堂の建設は昭和四十六年（一九七二）、ようやくその機が熟し、「大塚地域総合施設建築計画」のひとつとして緒につくことになった。しかし、客観情勢と校内事情は大講堂としての単独用途施設の建設を許さず、数次に及ぶ企画の変転を経て、講堂兼体育館と学園統括管理機関たる法人棟の併設ということになったのが第一期建設であった。同四十六年七月二十四日の吉日を期して地鎮祭を行い、翌年の五月末の竣工を目指して工事が開始された。

斬新な設計による構造・色調の講堂兼体育館は、二階席を併せて一一〇余名を収容の客席、舞台間口一八メートル・奥行七メートルの本格的な舞台規模であった。体育館としてみれば、木床、縦三二メートル・横二〇メートル、天井の高さ八メートルの場内は機械換気と調光機能を加え優れた競技の場となった。隣接する白亜の法人棟とともにその偉容は見るべきものがあつた。

第一期建築計画完了に伴って第二期建築が開始された。これは昭和四十八年度実施の高等学校・中学校のカリキュラム改訂に対応する教室の増



加・拡充を主目的とし、併せて体育施設整備拡充のためのものであった。昭和四十七年（一九七二）八月成蹊館が解体・撤去された跡地に、二号館に隣接する形で新校舎の建築工事が開始された。突貫工事で進められ翌年三月末に、普通教室六、特別教室四（調理・洋裁・絵画・工作）とその準備室二、職員室一の四階建て延べ面積一五二〇平方メートルの鉄筋コンクリート造りの校舎が完成した。引き続き三号館としてあった木造の旧短期大学校舎を解体・撤去し、跡地に高等学校・中学校専用の体育館が建築された。鉄骨・軽量コンクリート屋根・壁構造、床面積五四〇平方メートルのものであった。

### (3) 学園祭

本校の学園祭の原点は、創立時の「成蹊館女生徒試業」にあると三代目校長飯野保は述べている。昭和三十七年（一九六二）の学園祭プログラムに「成蹊館という講堂の正面、小松宮彰仁親王の書かれた学問の神『八意思兼神』という神号をかか

昭和五十年当時の大塚校舎全景①本館②四階に建て増した別館③中高体育館④高二校舎⑤高三校舎⑥短大体育館⑦短大校舎⑧跡見講堂⑨法人本部棟



げて、生徒一同が緋の袴をつけて整列し、幣帛を奉り、神饌を供え、花蹊先生が祝詞をよまれ、祭典が行われたのであります。祭典が終わると多数の来賓の前で生徒は国語漢文を朗読したり、講義をしたり、また、席上揮毫を行ったりしたのであります。それがいわゆる試業であります。その他学業成績などの展示もありましたが今日の学園祭のはじめとすべきではありません」と寄せている。

戦後は昭和二十八年（一九五三）「生徒会クラブ発表会」という名のもとに発足し、その後、「生徒会発表会」「文化祭」「学園祭」といろいろ名称を変えながら催してきた。

昭和四十七年（一九七二）、教育協議会が出した「本学園六ヶ年学校行事および年間行事に関する答申」によると、「従来春の運動会を、秋に実施していた学園祭にあわせて実施することの可能性を充分協議し、学校行事のリズム

の上から二つの大行事を集中的に実施することの利点を認めあった」とある。昭和四十八年（一九七三）から十月の一週間を学園祭として、生徒が掲げるスローガンのもとに前半を文化祭、後半を体育祭として実施し、今日に至っている。

それまでの学園祭が、とかく文化系クラブの研究発表の場という型にはまったものの反省にもとづいて、有志参加が積極的に行われるようになった。それによって社会的風潮に合わせた発表や展示、演劇、模擬店など活気ある祭典となった。多くの生徒達が、自らものを作る喜びや、難しさを知る場を得たのである。毎年七〇〇人を越える参観者を迎えて、厳しい評価を受けながら、明日の発展へと繋げているのである。

#### (4) 加藤幸雄校長の就任

横田正次校長の辞任を受けて、昭和五十六年（一九八一）九月、加藤幸雄が選出され、第五代校長に就任した。

加藤幸雄は、昭和三十年（一九五五）に国語科教員として奉職、学生時代の経験を活かして直ちにソフトボール部顧問としても活動、部の全盛時代を築いた。昭和四十七年（一九七二）には、教育協



加藤幸雄

議会議長として飯野校長の諮問に対し、現在に至る本学園の教育理念の根幹となる答申案をまとめた。

校長就任後は、私学教育研究所私学経営研究会会長、東京女子教育懇談会幹事、全国普通科高等学校校長会常務理事などの要職を歴任、私学の発展に尽力した。平成元年（一九八九）九月には、学校教育の功勞により東京都知事から表彰、平成四年（一九九二）一月には全国私立中学校・高等学校校長を代表して、歌会始の儀・陪聴者として参列した。同年三月退任後は神奈川県白鵬女子高等学校の懇請を受け、再度校長として同校の発展に尽力した。加藤校長が就任時、生徒会誌に寄せた一文をここに挙げる。

人の世でもっとも大きな喜びの一つは、よき親のもと、よき師に出遭う。邂逅。よろこびであると思われます。百万人を数える東京の中学生・高校生の中で、縁あって跡見に学び、美しい桜の校章を胸につける千七百名の跡見っ子たち。そのだれ一人をとつても、これからの何十年の人生の基をつくる大切な時、

小さな自分だけの殻の中に閉じこもらず、とられない広い眼と心のゆたかさをもつて、めぐり逢った人々、めぐりあつた事ども、めぐりあつた書物や、果てしない青空、そのまほらをわたる白雲、あるいは一輪の花・一本の草木等それぞれの存在を姿を、自分の心の糧としていつてほしいと思います。

すべてが当然であると思う心からは、とかく謙虚さと感動がなくなります。また、ものの奥にある心や本当の姿が見えなくなりがちです。心静かにすなおなものの方を感じられる時、ふれあうもののがたに、おどろきを感じ、喜びと感謝の念が生まれてくるのをしみじみと感ずる時があります。

### (5) 遠足・校外授業

戦後の混乱の中、遠足が始まったのは昭和二十二年（一九四七）十月二十四日のことであつた。記録によると一年生が深大寺・井ノ頭公園、二年、三年が観音峠、四年が江ノ島、五年が相模湖、専攻科が野猿峠、いずれも鉄道を利用しての実施であつた。この年十月二十九日には一年生が白子農

園に芋掘りに出かけている。学校から農園まで片道約一二キロの距離を、途中一軒の農家を借りて手洗い休憩するだけの強歩とも思われる行程であった。その後、この行事は東上線を利用しての実施となり、昭和三十八年（一九六三）まで続いた。

遠足は昭和二十年代は春と秋に実施されていたが、同三十年代は春の運動会、秋の遠足となった。そして、昭和四十八年（一九七三）から秋に学園祭（体育祭・文化祭）が実施されることにより、遠足は再度春に移行した。例年、学年により行き先は一貫性があるわけではないが、花蹊の歌にもある、

群れのぼる 高尾の山の杉の間に

子らがりぼんの 見えかくれする

の高尾山は、今日でも根強い実施地のひとつになっている。

自然の中で体力の増進をはかることを目的とした行事ではあるが、交通手段の発達で実施地は遠方になったが、内容は必ずしも目的に合わなくなつた面もある。

教科活動の一貫として教室を飛び出し、自然の中の生活体験や文化遺産の鑑賞・研究などを通して、教育効果を高める校外授業が早くから取り入れられ今日に引き継がれている。その一例をまとめて列記しておく。

国語科 歌舞伎鑑賞 文楽鑑賞 雅楽鑑賞  
能・狂言鑑賞

社会科 さきたま古墳群見学 江戸東京博物館見学 貨幣博物館見学 東京地方裁判所傍聴

理科 葛西臨海水族館見学 鹿島研究所見学

芸術科 小石川植物園写生会

家庭科 テーブルマナー 江戸東京建物園見学

## (6) 自然教室の推移

昭和四十六年（一九七二）、学内に設けられた教育協議会は「学校行事は情操教育の実践の場」として、特別教育活動の一領域としての位置付けを明確に示した。そのなかで自然教室の意義を次のように述べている。「生徒にとって学校生活から解放されて、自然の中で生活することは、自然の



美、自然のきびしさ、自然の恵みなどに触れ、自然と人間との対話の場を与える。この場合、楽しく且つ規律ある集団生活を基盤とし、充実感があり、協同性があり、そして計画性もある生活態度を養成する」とある。

これにより従来実施されて来た鶴原の中学一年臨海学校、北軽井沢の中学二年林間学校、中学三年修学旅行中止(昭和四十五年)後の赤倉の自然教室に一貫性を持たせて、「自然教室」としての目的と位置づけを明確にした。

昭和四十八年(一九七三)、浅間山の噴火活動が活発になったため、浅間寮の使用を見合わせたことを受けて、この年の中学二年生は那須高原に活動の場を移して実施した。そして、翌年中学三年時に浅間寮を利用することになった。そのため学年としての活動が、中学一年時鶴原、中学二年時那須高原(昭和五十四年以降は奥日光丸沼高原)、中学三年時浅間高原をフィールドとして行われるようになった。

昭和五十七年(一九八二)から中学一年の行事に、開始以来無事故の記録をより確実なものにすべく、水泳界の重鎮で本校生の保護者古橋広之進の協力

を得て、ライフセーバーの導入を決定し実施している。中学二年は、丸沼高原ホテルを宿舎として、鳩待峠から尾瀬が原竜宮小屋までを散策する往復一五キロの歩行と、二五七八メートルの日光白根山の登山が中心になっている。中学三年最後の自然教室は、北軽井沢の高原に広がるさわやかな空気に包まれながら、飯ごう炊さんやキャンプファイアを通して、自然と人間のあり方を考える思索の場でもあった(平成十五年以降、総合平和学習として修学旅行復活のため中止)。

#### (7) 生徒会規則の改定

昭和二十五年(一九五〇)に生徒会が発足してから、今日まで生徒は自らの手で互いの秩序を保ち互いの幸福を増進していく事を意図して、充分な自覚と責任を持って活動してきたといえるだろう。昭和三十二年(一九五七)に、会員との交流をより密にするために、朝の生徒集会が誕生した。昭和三十六年(一九六一)に、直接選挙制で選ばれた最初の会長が広報誌『いずみ』を創刊し情報の提供にとめた。昭和三十八年(一九六三)には会長の補佐役として書記局を設置し、会員の声をより多く吸収した。そのほか、講演会を開いたり、投



書籍を設けたり、親睦をはかるために新入生歓迎会・球技大会・フオークダンスなどを企画してきた。これまでの『跡見』や『いずみ』に目を通すと、最も多く取り上げられているテーマが「生徒会とは何か」である。年月を経て、人は代われど制度・組織は不変である。少しでも運営に円滑さを欠き、活動が滞ると人は規則の不備を思うのだそうだ。不備は改めなければならぬ。

昭和四十六年（一九七二）ごろから会則改正の動きが出て、昭和四十七年（一九七二）に会則改正委員会が結成され、昭和四十八年（一九七三）に本格的な審議に入った。改正のねらいは①生徒会は生徒の生活に根ざしたものであること②その組織は会員にわかりやすく簡潔なものであること、というものであった。このとき、成文化されたものが現在も適用されている生徒会会則・選挙規則などである。

る。今、それぞれの会則・規則・細則の最終条文を見ると、出発点が昭和四十九年（一九七四）であることが明記されている。この会則をもって多くの会員が、今日まで年々歳々活動を積み重ね、より良い生徒会を築くための努力をしてきたのである。

### (8) 生徒の活動B

昭和四十六年（一九七二）

ソフト部 東京都中学校ソフトボール選手権

優勝・私学大会優勝

東日本高校女子ソフトボール選手

権東京代表

化学部 日本学生科学賞東京都審査最優秀

賞

◎ 高松宮杯英語スピーチコンテスト

東京都一位

昭和四十七年（一九七二）

卓球部 全国中学校卓球選手権大会東京代

表

ソフト部 東日本高校女子ソフトボール選手

権東京代表

◎ 全国読書感想文コンクール東京優



受賞した数々のカップや楯

秀賞(野村由利)

昭和四十八年(一九七三)

繊維工芸部 日本手工芸文化協会会長賞受賞

(柴崎尊子)

昭和四十九年(一九七四)

テニス部 全国高等学校総合体育大会東京代表

表

バスケット部 東京都高等学校バスケットボール

選手権大会優勝

化学部 日本学生科学賞東京都審査最優秀

賞

◎ ホノルル市長杯全国青少年英語弁

論大会高校の部三位入賞(柳下泰

子)

昭和五十年(一九七五)

テニス部 全国高等学校総合体

育大会東京代表

バスケット部 関東高校女子バスケ

ットボール選手権大

会東京代表

昭和五十一年(一九七六)

繊維工芸部 日本手工芸文化協

会会長賞受賞(神林未紀)

昭和五十三年(一九七八)

繊維工芸部 日本手工芸文化協会会長賞受賞

(五百木恵子)

昭和五十四年(一九七九)

繊維工芸部 日本手工芸文化協会会長賞受賞

(小沢加美)

昭和五十六年(一九八一)

◎ 全国読書感想文コンクール入選

(吉田仁美)

昭和五十七年(一九八二)

繊維工芸部 日本手工芸文化協会会長賞受賞

(海老名久枝)

昭和五十八年(一九八三)

ソフト部 関東中学校夏季ソフトボール大会

東京代表

昭和六十年(一九八五)

繊維工芸部 日本手工芸文化協会会長賞受賞

(合作)

(9) 教員の研修

「わが国の地理的位置あるいは歴史的関係が、優れた文化をうみ、清浄な関係を守り、千年二千

## 匠の卵

日本刺繍という昔からの伝統と技術を伝える「匠の卵」が活動しているクラブがある。織維工芸部である。同部は昭和二十三年（一九四八）の発足当初から顧問であった（平成十五年まで）板谷春子教諭の指導の下で、手工芸美術展では毎年のように大賞を得ている（生徒の活動A・B参照）。

昭和四十八年（一九七三）、美術展に出品した高校三年生の武井文子の日本刺繍「古都の秋」

が、当時のポンピドー仏大統領夫人の主催した「日本の総合美術フランス・パリ展覧会」に、日本手工芸文化協会の推薦を受けて出展された。武井は、この展覧会とジョージ五世ホテルで行われたレセプションに出席するため、同年十一月二十七日、羽田空港から友人らに見送られ渡仏した。作品を日本大使館に寄贈したこともあり、当時の中山大使夫妻に公邸に招かれ歓待された。作品は今でも在仏大使館の一室に飾られていると聞いている。

年の昔の文献を正しく読み、正しく理解する『言魂の幸はふ国』として国民の誇りとしてきた」と飯野保は述べている。アメリカの占領下におかれ、そのことを憂いた国語科教員が、国語科研究会を発足させ『跡見学園国語科紀要』を創刊したのが昭和二十八年（一九五三）八月であった。

それとともに各教科・個人においても、授業内容の充実や専門分野の探求が進み、研究日の設定についての検討が昭和三十五年に始まった。当初

は申請者のなかから毎年一日研究日を数名、半日研究日を五〜六名と定めてスタートした。昭和四十七年（一九七二）からは、毎年半数の専任教員が一日研究日を取得することとなった。一日研究日が生徒指導上にも、経済的にもまったく問題がないわけではなかったが、「個々の責任においてその内容を決定づけ、明日の発展につながる研鑽を続けて欲しい」と研究日の設定に尽力した横田正次は述べている。昭和四十八年（一九七三）九月に

は『跡見学園中学校・高等学校紀要』が創刊、ここにその成果が発表されることとなった。以来平成十四年(二〇〇二)まで見ると、延べ一三〇本余にのぼる論文が発表されている。

教員研修はこのほかに研究授業や海外研修の形でも実施された。

昭和三十四年(一九五九)に国語科研究会・研究授業の記録があるが、全体としては、同四十八年から研究授業実施について検討が行われた。そして、この年の十一月に全教科にわたって公開授業の形で研究授業がスタートした。しかし、公開授業の形が必ずしも問題なしとしない点もあって、同五十年代中ごろには各教科ごとの公開授業形式、またはシンポジウム形式で研修は続行された。

昭和五十一年(一九七六)には長期の海外(国内)研修制度がスタートした。平成十六年(二〇〇四)までで延べ七人の教員がこの制度を活用した。翌昭和五十二年(一九七七)からはPTA連合会の強力な支援によって、長期休暇を活用した二〜三週間の短期海外研修制度もスタートした。この制度によって研修を受けた教員は平成十六年現在延べ七九人にのぼっている。